

「消息」「会話」に於ける係助詞の相違

——平安前期・『落窪物語』を中心として——

松岡千賀子

1. 目的

係助詞の研究は多方面から進んできたが、文体別用法に関しては、「地」「会話」「心話」の3文体別考察が大半を占め、「消息」は「会話」と同分類に扱われる場合が多かった。しかし、前者は文字、後者は音声を使つての伝達手段であるから、文体的にも文法的にも違いがあったはずである。つまり、この2文体を区別すれば、従来の3文体別では見えていなかった書記言語・音声言語間に於ける文法的変遷のずれを、より詳細に把握していくことが可能と考えられる。

こうした係助詞の機能を文体別に確認するため、平安時代の作品を、変遷の特徴に照らして4期に分け、用法を調査した結果、以下の相違が明らかになった。(4期は次のような分類である。I期：『竹取』『土佐』『伊勢』『平中]、II期：『大和』『多武峰』『篁』『宇津保』『蜻蛉』『落窪]、III期：『和泉』『枕』『源氏』『紫]、IV期：『堤』『寝覚』『浜松』『更級』『狭衣]。)

- ①「地」……「なむ」が減少し、III期以降「ぞ」が増加する。
- ②「会話」……「なむ」が多いが、時代と共に「こそ」が増加し、IV期に逆転する。
- ③「消息」……一貫して「なむ」が多い。
- ④「心話」……一貫して「こそ」が多い。

以上の結果が示すとおり、4文体別に分析することによって、従来の3文体別では見過ごされていた使用傾向の相違が確認できた。この相違の持つ意味を明らかにするため、本論では対象を『落窪』の「会話」と「消息」に絞り、それぞれの係助詞の用法と特徴を考察してみたい。「地」「会話」に変化が生じる前の用法を、10世紀後期の『落窪』を基に分析し、今後、11世紀以降の変遷へと繋げていくことが研究の目的である。

2. 先行研究

2-1 3助詞の特性

はじめに、これまでの研究に於いて、3助詞の特性がどのように分析されてきたか確認しておく。

①「ぞ」

- ・「ぞ」の多い作品が日記となり、(永井洸〔1938〕)
- ・細やかなニュアンスや色づけをもたずに事柄を判断し、指示し、強調する(宮坂和江〔1952〕)
- ・主観的表現・客観的表現の別を問わず用いられ、その受ける語の意義を指示する。(此島正年〔1973〕)
- ・具体的な事実に関して、客観的に叙述する態度で強調する表現。(長尾高明〔1987〕)
- ・具体的事実として認識された内容を主観的に説明する。(林田明〔1975〕)
- ・未知の情報の教示や報知や断定を中心として、概して上からの姿勢で使われた。(大野晋〔1993〕)

先行研究を照合すると「ぞ」は、主観・客観の違いはあるものの、事実を細やかなニュアンスを持たずに判断し、上からの姿勢で使われる助詞として位置づけられてきたことが分かる。

②「なむ」

- ・「なむ」の多いものが物語となり、(永井洸〔1938〕)
- ・意を強めるといふよりは、意を深めるといふべきである。(松尾捨治郎〔1961〕)
- ・事柄を自身が納得して確かめたいという意識から、聞き手にも確認させるように語る強調表現。(長尾高明〔1987〕)
- ・話し手の内心の知識・判断を、下からの謙遜・卑下の姿勢によって相手に向かって強調する役目を負っていた。(大野晋〔1993〕)

先行研究を照合すると「なむ」は、相手のことを慮り、謙遜の気持ちを持ちつつ強調する助詞として位置づけられてきたことが分かる。

③「こそ」

- ・「こそ」の多いものが随筆となる。(永井洸〔1938〕)
- ・観念的事象として認識された内容を主観的に判断する。(林田明〔1975〕)
- ・主観的な選抜を示し、その結果を提示して強調する。(大野晋〔1993〕)

先行研究を照合すると「こそ」は、主観的に判断する助詞として位置づけられてきたことが分かる。

2-2 3 助詞の強弱関係

3 助詞を比較した研究は、強調の度合いに関する指摘が多い。

- ・「ぞ」<「こそ」(富士谷成章・此島正年)
- ・「なむ」<「ぞ」<「こそ」(山田孝雄・長尾高明)
- ・「なむ」「ぞ」<「こそ」(松尾捨治郎)

(20)

先行研究を照合すると、「こそ」は強く「なむ」は弱い、という位置づけで一致している。

2-3 3 助詞の文体別研究

係助詞の文体別用法に関しては、永井洸〔1938〕・宮坂和江〔1952〕等が、以下のよう

・地は「ぞ」が中心であるものの、ジャンルによって傾向が異なる。

（日記・随筆は「ぞ」、物語は「なむ」が多い。）

・会話は「なむ」「こそ」、心話は「こそ」が多い。

4 文体別の研究には、若林〔1961〕・森野〔1987〕¹がある。若林は、「こそ」が「会話」に多く「消息」に少ないことを指摘し、「会話」は「話し手が目の前にいる書き手に強く訴えたり説明したりして、絶えず注意をひきつけようとする」ため「論理的にも感情的にも最高度の『こそ』」がふさわしく、「消息」は「相手が目の前に現存しないから、話しかけを意図しながらも、ともすれば自らのうちに」こもり、「自己の感情や感動も、話し言葉から書き言葉に変わることによって、静かな調子に変わってくる」ため、「語感のゆるやかでやわらかい調子の『なむ』」が使われたと論じている。だが、結びの用法の違いには言及していない。

3. 研究方法

今回用いた分析方法は以下の通りである。

3-1 分析対象作品

分析対象に選んだ作品は『落窪』である。理由は、次の点に因る。

- ①予備調査の段階で、『落窪』は「会話」に於ける「こそ」の割合がやや高かったものの、II期の平均的な傾向とほぼ一致していた。従って10世紀後期の標準的な用法で書かれた作品と位置づけることができる。
- ②『落窪』は「会話」「消息」の用例が多い上、登場人物が多岐に亘る。従って夫婦・主従・親子・兄弟姉妹他、様々な人間関係に於ける用法を確認することができる。
- ③平安の代表作といえは本来『源氏』であるが、『源氏』はIII期、即ち「地」の用法に変化が生じた後の作品である。まず変化前の『落窪』の傾向を押さえておくことによって、今後、11世紀以降の変遷についての研究に繋げることができる。

3-2 分析方法

分析の手順は以下の通りである。

① 4 文体別 3 助詞の出現率

はじめに、『落窪』が標準的な文体で書かれた作品であることを確認するために、『落窪』中の 3 助詞（「ぞ」「なむ」「こそ」）を 4 文体（「地」「消息」「会話」「心話」）別に分類して、全用例中に占める割合を百分率で表し（論文中では、これを「出現率」と記す）、平安前中期の作品（Ⅱ期：『大和』『多武峰』『篁』『宇津保』『蜻蛉』『落窪』、Ⅲ期：『和泉』『枕草子』『源氏』『紫』）の平均出現率と比較する。

② 「会話」中の結びの用法

①で分類した「会話」中の係助詞を、結びのあるもの（論文中では「普通結び」と記す。以下同）、結びの省略されているもの（結び省略）、結びの流れているもの（結び流れ）、結びの誤った形のもの（結び誤り）、文末で終助詞化して使われているもの（文末用法）に分類し、傾向を分析する。

③ 「消息」中の結びの用法

①で分類した「消息」中の係助詞を、②と同様に分類し、分析する。

④ 「会話」「消息」中の普通結び・結び省略の比較

「会話」「消息」間に違いの見られる「なむ」「こそ」に注目し、普通結びと結び省略について用例を分析する。

4. 4 文体別 3 助詞の出現率

『落窪』が分析対象としてふさわしい作品であることを確認するために、同時代（Ⅱ期：大～落）の平均出現率と比較した結果が次の表である。Ⅲ期：和～紫の平均出現率と『源氏』の出現率も参考までに併記した。

4 文体別 3 助詞出現率表

□「ぞ」が最も多い ▨「なむ」が最も多い ■「こそ」が最も多い

	「地」			「消息」			「会話」			「心話」 (%)		
	ぞ	なむ	こそ	ぞ	なむ	こそ	ぞ	なむ	こそ	ぞ	なむ	こそ
大～落	39.4	< 57.5 >	3.1	12.9	< 68.6 >	18.5	24.4	< 44.2 >	31.4	34.3	> 7.5 <	58.2
『落窪』	25.7	< 71.6 >	2.8	7.7	< 75.4 >	16.9	27.2	< 36.4 =	36.4	46.5	> 4.7 <	48.8
和～紫	66.6	> 8.4 <	25.0	6.0	< 62.7 >	31.3	18.5	< 40.8 ÷	40.7	28.4	> 0.5 <	71.1
『源氏』	66.9	> 20.9 >	12.3	1.3	< 78.8 >	19.9	5.5	< 50.5 >	44.0	15.1	> 2.1 <	82.8

この結果から、以下の傾向を読み取ることができる。

- ① 「会話」と「消息」は、
・「ぞ」の出現率が低く、「なむ」の出現率が高い。

(22)

という点では共通するが、

- ・「会話」は、「なむ」に加えて「こそ」の出現率も高い。
 - ・「消息」は、「なむ」の出現率が高く、「こそ」の出現率は低い。
- という違いがある。

②執筆者の性差（男性の手による『落窪』と女性の手による『源氏』）に因る大きな違いは見られない。

これまでの3文体別研究では、宮坂〔1952〕によって、

- ・「地」は「ぞ」「なむ」が多く、時代が下るにつれて「ぞ」が増加する。時代を問わず「こそ」は少ない。
- ・「会話」（「消息」を含む）は「なむ」「こそ」が多く、「ぞ」は少ない。
- ・「心話」は「こそ」が多く、「なむ」は殆ど使われない。

といった傾向が指摘されていたが、今回、4文体別に分類し直してみた結果、新たに「会話」と「消息」では、「こそ」の出現率に違いのあることが確認できた。こうした相違点の考察を進めるために、今度は結びの用法に注目し、分析してみることにする。

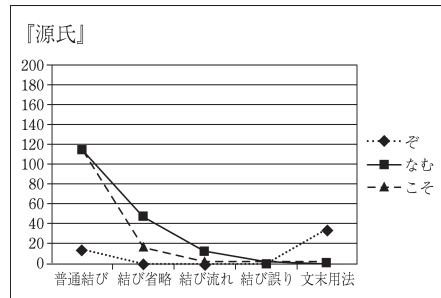
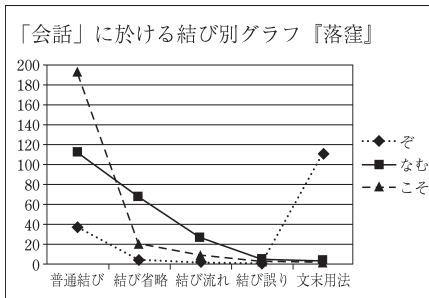
5. 「会話」と「消息」に於ける結びの用法

5-1 「会話」に於ける結びの用法

『落窪』の「会話」に於ける結び別用例数とグラフは以下の通りである。参考までに『源氏』のグラフも併記する。

「会話」に於ける結び別用例数『落窪』

	普通結び	結び省略	結び流れ	結び誤り	文末用法
ぞ	37	5	2	0	111
なむ	114	68	26	5	4
こそ	194	20	9	3	2



前頁のグラフから、「こそ」と「なむ」の普通結びが多く、「ぞ」の文末用法がそれに続いていることが読み取れる。この結果は『源氏』とも同傾向であるため、10世紀後期～11世紀前期の用法は、以下のように位置づけることができる。

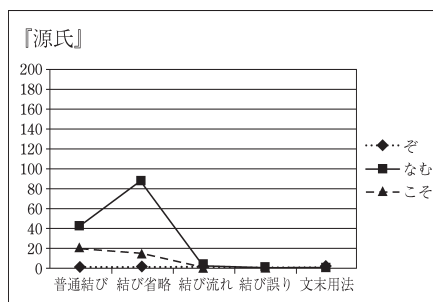
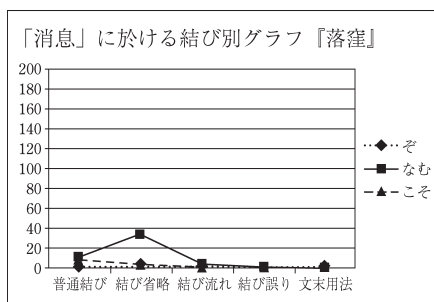
「会話」に於ける係助詞の代表的な用法は「こそ」「なむ」の普通結びである。

5-2 「消息」に於ける結びの用法

『落窪』の「消息」に於ける結び別用例数とグラフは以下の通りである。「会話」と同様、『源氏』のグラフも併記する。

「消息」に於ける結び別用例数

	普通結び	結び省略	結び流れ	結び誤り	文末用法
ぞ	1	1	0	0	3
なむ	11	34	4	1	0
こそ	8	4	0	0	0



上のグラフから、「なむ」の結び省略の多いことが読み取れる。この結果は『源氏』とも同傾向であるため、10世紀後期～11世紀前期の用法は、以下のように位置づけることができる。

「消息」に於ける係助詞の代表的な用法は「なむ」の結び省略である。

5-3 「会話」と「消息」に於ける結びの用法の比較

2作品の「会話」と「消息」の結びを比較した結果、

(24)

- ・「ぞ」 ……「会話」「消息」共に最も用例が少ない。（「会話」では文末用法が使われ、「消息」ではどの用法も極めて少ない。）
- ・「なむ」 ……「会話」では普通結びが多いが、「消息」では結び省略の用例が多い。
- ・「こそ」 ……「会話」では普通結びが多いが、「消息」では用例が少ない。

という違いのあることが分かった。2作品の係助詞は、10世紀後期～11世紀前期の標準的な用法と位置づけられるため、この結果は当時の傾向を反映しているといえる。

つまり、過去の研究で同一文体として扱われることの多かった「消息」と「会話」は、係助詞の種類別使用頻度ばかりでなく、結びの用法にも違いが見られるのである。

「ぞ」の用例が「会話」「消息」共に少ない理由は、先述したとおり「上からの姿勢」で使われる傾向が強く、対人意識の強い場面では好まれなかったためと考えられる。それは数少ない「消息」での用例（ア・イ）が、相手を非難する場面で使われている点からもうかがえる。

ア 「いでや、心づきなく。こは何事ぞ。昨夜の心も限りなくあいなく、心づきなく、腹ぎたなしと見てしかば、今行くさきもいと頼もしげなくなむ。（以下略）」

【阿漕→帯刀1-108²】

イ 「いでや、『降るとも』と言ふこともあるを、いとどしき御心ざまにこそあめれ。さらに聞えさすべきにもあらず。御みづからは、何の心地のよきにも、来むとなにあるぞ。（以下略）」【阿漕→帯刀1-121】

アは、少将からの後朝に答えようとしないう落窪に代わって、阿漕が帯刀に苦情を述べた「消息」、イは雨のために来られない少将に代って、一人で訪れようとする帯刀への批判の「消息」である。どちらも不満を伝える場面であるため、上からの姿勢の「ぞ」を用いていると考えられる。次に、

- ・「こそ」が「会話」に多く「消息」に少ない理由
- ・「なむ」の「会話」「消息」に於ける用法の違い

を考察してみることにする。

6. 「会話」「消息」中の「こそ」

6-1 「こそ」の文体別先行研究

これまでの研究の中で、「こそ」は3助詞の中で最も強い強調であるという点で一致している。

また若林〔1961〕は、「こそ」が「会話」に多く、「消息」に少ない点について、「会話」は「話し手が目の前にいる書き手に強く訴えたり説明したりして、絶えず注意をひきつけようとする」ため「論理的にも感情的にも最高度の『こそ』」がふさわしく、「消息」は「相手が目の前に現存しないから、話しかけを意図しながらも、ともしれば自らのうちに」こもり、「自己の感情や感動も、話し言葉から書き言葉に変ることによって、静かな調子に変わってくる」ため、「語感のゆるやかでやわらかい調子の『なむ』」が使われたと論じている。

6-2 「こそ」の結び成立

「こそ」は、いずれの文体に於ても普通結びが多い。従ってここでも普通結びの用例を取り上げる。

(1) 「会話」に於ける「こそ」結び成立の用例

「会話」中の「こそ」は、夫婦・恋人・親子・兄弟・主従間他、様々な人間関係で使われている。「消息」中と異なり、目上・目下を問わずに使われている点が特徴である。

ウ 「いとわりなきこと。(中略)かくをしきことを見じと思ふ人はありなむや。嫗だにしたまひるる道にこそあめれ」【阿漕→継母 1-93】

エ 「げにこそ、あやしうは侍れ。上のあやしう思はむは例のこと、御はらからの君達さへみづから聞えたまはざるこそ、いと心づきなけれ。あたら御さまを、かくてつくづくとおはしますこそ、あいなけれ。(以下略)」【少納言→落窪 1-149】

オ 「何かけしからず侍らむ。道理なきことにも侍らばこそあらめ」【阿漕→落窪 3-272】

ウは継母の皮肉に対する阿漕の弁明、エは落窪に対する少納言の精一杯の励まし、オは継母を庇う落窪に対する阿漕の皮肉である。いかなる相手に対しても臆することなく主張しようとする強い意志が感じられる。

(2) 「消息」に於ける「こそ」結び成立の用例

「こそ」の「消息」中の用例は少ない。相手は夫婦・恋人または自分と同等以下の近い人物である。

カ 「いでや心づきなく。(中略)御前には、いと悩ましげにて、まだ起きさせたまはざめれば、御文もさながらなむ。いとこそ心苦しけれ、御けしきを見るは」【阿漕→帯刀 1-109】

キ 「おとづれたまはぬをこそ、いと心憂く思ひたまふれ」【和泉守妻→阿漕 1-113】

ク 「(前略)さきざきも御迎へすれども、渡りたまはぬこそ、恨みきこゆれ。(以下略)」【和泉守妻→阿漕 1-118】

(26)

ケ いみじう口惜しと思ひて、帯刀が返事に、

「いでや、『降るとも』と言ふこともあるを、いとどしき御心ざまにこそあめ
れ。(以下略)」【阿漕→帯刀 1-121】

カ・ケは、なんとかして落窪を助けたい阿漕が、もどかしさと怒りを帯刀にぶつける「消息」、キ・クは、阿漕を心配するあまりに発した和泉守妻の恨み言の「消息」である。いずれも最高潮に達した感情が表れており、気心の知れた相手故に遠慮なく書くことのできた内容である。相手が目の前にいない「消息」は「会話」以上に誤解を生みやすい。目上相手の「消息」に「こそ」が使われにくいのは、こうした語気の強さが原因と考えられる。

7. 「会話」「消息」中の「なむ」

7-1 「なむ」の文体別先行研究

「なむ」は過去の研究に於いて、「対人意識に関わる助詞」という位置づけで一致している。また若林〔1961〕は、「なむ」が「会話」「消息」に多く、「消息」では結び省略の多いことを指摘し、「特定の対人関係において現われうる」「終助詞的な用法」と分析している。しかし、「会話」よりも「消息」に用例の多い理由については言及していない。

7-2 「なむ」の結び成立

「なむ」の「会話」に於ける結び成立は、親子間が最も多く、夫婦・恋人間、主従間がそれに続く。「消息」に於ける結び成立は、夫婦・恋人間、親子間に大差なく使われている。

(1) 「会話」に於ける「なむ」結び成立の用例

コ 北の方、いとうれしと思ひて、衣高らかに引き上げて、落窪にいまして、つい居たまひて、「いといふかひなきわざをなむしたまひたる。『子どもの面伏せに』とて、おとどのいみじく腹立ちたまひて、『こなたにな住ませそ。とく置きたれ』とのたまへる。いざ給へ」【継母→落窪 1-161】

サ 「さななり。色好みは、人のせぬやうをせむとなむ思ふなる」【継母→四の君 2-216】

コは、継母が落窪に対して「なむ」を使う数少ない用例として注目される。継母はサのように、実の娘にあたる四の君にも「なむ」を用いているが、後者は一般論を述べているにすぎず、ごく普通のやわらかい強調である。コは疎ましく思っていた落窪を物置部屋へ追放できる満足感が表れており、やわらかさというより慇懃な印象を与える用例である。

シ 「さもあらず。皆をかしげになむおはしあふめる。あやしう見苦しうても見たまへる かな。(以下略) 【落窪→少将 1-134】

ス 「うへはかくなむのたまふかし」 【少将(中将)→落窪 2-253】

シは、落窪が「継母の姫君達が継母に似ているか」との問いに反論する場面、スは中将が落窪に祭見物を勧める場面である。相手を説得しようとする冷静さが感じられる用例である。

(2) 「消息」に於ける「なむ」結び成立の用例

セ 「腹はけしからず。人もこそ聞け、かうな思し出でそ。いとよう笑みてなむあめる。(以下略) 【落窪→少将 1-158】

ソ 「からうじて参りたりしかど、御門さしてされにあげざりしかば、わびしくてなむ帰りまうで来にしや。おろかにぞ思すらむ。少将の君の思したるけしきを見はべるに、心の暇なくなむ。これは御ふみなり。いかで夜さりだに参らむ」 【帯刀→阿漕 2-187】

セは、継母を非難する少将に対し、落窪が擁護する「消息」、ソは帯刀が阿漕に、少将の「消息」を託す「消息」である。夫婦・恋人間であるものの、いわゆる恋文ではなく、説明重視の内容である点が共通している。

タ 「いとうれしう。聞えさせたりし物を、賜はせたりしなむ、よろこびきこえさする。またあやしとは、思さるべけれど、今宵餅なむ、いとあやしきさまにて、用侍る。取り交ずべきくだ物など侍りぬべくは、少し賜はせよ。まらうとなむ、しばしと思ひはべりしを、四十五日の方違ふるになむ侍りける。されば、この物どもはしばしと思ひ侍るべきを、いかが。(以下略) 【阿漕→叔母 1-116】

タは阿漕が親代わりとして慕う叔母に、女君の三日の夜の準備を相談する「消息」である。詳細かつ具体的な内容となっている。

7-3 「なむ」の結び省略

「なむ」の結び省略の用例は、「会話」「消息」共に「恋し」「いとほし」「うれし」「心憂し」といった感情を表す形容詞と一緒に用いられる例が多いという特徴がある。

「会話」に於ける結び省略は、主従間、親子間、夫婦・恋人間に幅広く使われている。一方、「消息」に於ける結び省略は、夫婦・恋人間の用例が多い。以下、用例を引用する。(「なむ」と併用される形容詞を□で示す。)

(1) 「会話」に於ける「なむ」結び省略の用例

チ 「(前略)『かく憎まれたてまつるべき宿世のあるなりけり』と思うたまへらるれば、憂きも憂からずのみなむ」 【少将→落窪 1-104】

ツ 「からうじて。御笛の袋縫はせたとまつりたまふとて、あけたまへる間になむ」 【阿漕→少将 2-179】

(28)

「会話」に於ける結び省略は、チのように恋心を打ち明ける場面や、ツのように「従→主」の用例が多い。この結果から「なむ」の結び省略は、相手の感情を重視し、謙遜の気持ちを表す場面で使われやすいと考えられる。

テ 「参りたるやうは、今日ここに買ひたる鏡のをかしげなるに、この御箱の入りぬべく見えし。『しばし、賜へ』と聞えむとてなむ」【継母→落窪1-132】

ト 「かう心やすくものしたまへば、いとよくなむ。さは賜へ」とて引き寄せたてまつりたまへり。【継母→落窪1-132】

ナ 「まだ幼くておのがもとにわたりたまひにしかば、わが子となむ思ひきこえしを、おのが心本性、立ち腹に侍りて、思ひなく物言ふこともなむ侍るを、さやうにてもや、もしものしきさまに御覧ぜられけむと、限りなくいとほしくなむ」【継母→落窪3-316】

テ・ト・ナは、前出のコと同様、継母が落窪に「なむ」を用いる数少ない用例である。継母→落窪の「会話」は、

ニ 「いで、この直衣はいづこのぞ」【継母→落窪1-144】

ヌ 「わが心を心とする者は、かかる目見るぞよ」【継母→落窪1-163】

のように「ぞ」（文末用法）の用例が多い。「ぞ」は、「細やかなニュアンスや色づけをもたず」（宮坂〔1952〕）、「上からの姿勢でなされる」（大野晋〔1993〕）という分析がなされてきた係助詞である。継母は、落窪に嫌悪感を持ち、見下げた気持ちで接していたため、多くの場面で「上からの姿勢」の「ぞ」を用いているのである。

上掲のテ・トは継母が落窪から手鏡を騙し取ろうとする場面、ナは終盤、大納言の北の方に出世した落窪と再会する場面での言葉である。前者は悪巧み故の慙懣、後者は落窪と立場が逆転した故の卑下の気持ちが表れている。「なむ」の特性を考える上で注目すべき用例といえよう。

ネ 「（前略）『かく憎まれたてまつるべき宿世のあるなりけり』と思うたまへらるれば、憂きも憂からずのみなむ」【少将→落窪1-104】

ノ 「今は、いかで殿に知られたてまつらむ。老いたまへれば、夜中、暁のことも知らぬを、見たてまつらでや、やみなむと心細くなむ」【落窪→少将（中将）2-256】

ネは少将が落窪に愛を誓う場面、ノは落窪が父中納言を心配する気持ちを少将に打ち明ける場面である。好意を持つ相手を慮りつつ気持ちを打ち明ける「なむ」の典型的な用例である。

（2）「消息」に於ける「なむ」結び省略の用例

「消息」では、少将 ⇄ 落窪、帯刀 ⇄ 阿漕といった「夫婦・恋人間＝親愛感情を持つ関係」間での用例、特にハ・ヒ・フのような恋文が多いという特徴がある。

ハ 「（前略）思うたまへ忍びつれど、さてもえあるまじかりければなむ。人知れず

人わろく】【少将→落窪1-91】

ヒ 「いつしか参りこむとて、しつるほどに、かうわりな^かめればなむ。心の罪にあらねど、おろかに思ほすな】【少将→落窪1-120】

フ 「(前略) まこと、『憂き世は門させりとも』と言ふやうに^出でがた^くなむ。あこぎは、『罪あらむ人は、おちたまひぬべかめり』】【落窪→少将1-137】

結び省略とは即ち余情表現である。「消息」は相手が目の前にいないため、書き手は読み手の反応を確認できない。書き手と読み手に時間差がある上、一度発信した内容は訂正することも不可能である。特に恋文ともなれば、相手に好意を持たれることを目的とするため、不快感を与えぬ気遣いが必要である。従って文末を省略することによって断言を避け、謙虚に相手をうかがう表現が好まれたものと考えられる。

8. 結論

以上の結果から、「会話」には「こそ」や「なむ」の普通結びが多く、「消息」には「なむ」の結び省略が多い、ということが確認できた。対人表現という点で共通しているにも関わらず、「会話」と「消息」で異なる結果が生じた理由は、以下のように考えられる。

- ①「会話」は、相手が目の前に存在するため、「消息」以上に複雑な内容のやりとりが可能である。従って最後まで暁すことなく言い尽す普通結びが好まれた。
- ②「会話」は、相手と時間差のないやりとりのため、高まった感情をそのまま吐露してしまうことがある。その反面、一旦言葉に出した後も、相手の様子次第で対応を変え、言い直せるという特性を持つ。従って「こそ」のような強い表現が多用された。
- ③「消息」は、恋文の占める割合が多い。恋文は好意を持たれることを目的としている。従って余情を残す結び省略が好まれた。
- ④「消息」は、相手が目の前に存在しないため、その場で反応を見ることができない。書き手と読み手に時間差があり、一度送ってしまったものは訂正も不可能である。従って、慎重に相手を伺う姿勢が求められた。その結果、「こそ」「ぞ」のような強い表現や、最後まで言い切る普通結びよりも、相手に敬意を払い、謙虚に気持ちを伝える「なむ」の結び省略が多用された。

9. 今後の課題と発展的視点

今回の研究で、平安前期の「会話」と「消息」では、係助詞の用法に違いのあることが確認できた。今後、『源氏』をはじめとする平安後期以降の作品についても考察を進めれば、係助詞衰退に至るまでの、より詳細な変遷を追うことができるはずである。また、こうした係助詞の研究は、書記言語・音声言語間の文体差と変遷のずれを確認する

(30)

糸口にもなり得る。

更に、係助詞の用法上、大きな変遷時期に当たる10世紀後期～11世紀前期は、ハ行転呼音の発生、音便の増加、音韻の変化、訓点語文法の固定化（『国語学大辞典』「訓点語」）、形容詞新複合動詞の増加（安部清哉〔1996〕）、形容詞・形容動詞の変化時期（村田菜穂子〔2005〕）、といった他の国語学史上重要な時期と一致し、平安第1期・第2期で区分される10世紀後半の変化時期（安部〔1996・1998〕）とも重なる。こうした他の文法変化との関連性についても考察する意義があると考ええる。

注

- 1 森野は、「なむ」が「会話文や消息に多く用いられる」と指摘しているが、2文体中の用法の違いには言及していない。
- 2 引用本文は日本古典文学全集『落窪物語・堤中納言物語』（数字は巻一頁を表わす、以下同じ。）

参考文献（研究論文が多いため、以下、直接関わるものを中心に抄録する。）

富士谷成章『あゆひ抄』（『国語学叢書』第二編 大岡山書店1946）／松尾捨拾郎『国語法論攷』（白帝社1961）／此島正年『国語助詞の研究』（桜楓社1973）／松下大三郎『改撰標準日本文法』（勉誠社1974）／林田明『『係結』の言語生態論的研究』（『千葉大学人文研究』1975）／安田章「コソの拘束力」『国語国文』（1980）／北原保雄『日本語の世界 6 日本語の文法』（中央公論社1981）／近藤泰弘「〈結び〉用言の構文的性格」『日本語学』（1986）／長尾高明「古文解釈と助詞—強調表現について」『国文法講座 3』（明治書院1987）山口明穂「五係結び」『国文法講座別巻』（明治書院1988）／大野晋『係り結びの研究』（岩波書店1993）／半藤英明『係助詞と係結びの本質』（新典社2003）／永井洸「係助詞「ぞ」「なむ」「こそ」の本質意義について」（『国文学攷』1938）／宮坂和江「係結の表現価値—物語文章論より見たる—」（『国語と国文学』1952）／水野良子「係結の表現より見たる今昔物語の文体」（『愛知県立女子大学説林』1957）／松島典雄「今昔物語に現われた係結の表現価値」（『国語国文学』1958）／蔵野嗣久「中世初期の強調表現に関する考察—「こそ」の用法を中心として—」（『国文学攷』1961）「古今著聞集の係助詞「ぞ」「なむ」「こそ」について」（安田女子大学紀要1968）「沙石集の係助詞「ぞ」「なむ」「こそ」について」（『国語国文論集』1970）「愚管抄の係助詞「ぞ」「なむ」「こそ」について」（同1971）／若林邦枝「落窪物語小考—消息文について—」（『女子大國文』1961）／当山公子「栄花物語における係結の現象」（『国文』1963）／小久保崇明「大鏡の結びについて」（『季刊文学・語学』1965）山口雄輔「『とはずがたり』の係り結び」（『立正女子大國文』1972）「係り結びよりみた『讃岐典侍日記』と『健寿御前日記』の相違」（『国語研究』34）「『宇津保物語』の構

造と係り結び」(『国学院雑誌』1977)「『狭衣物語』の係り結び—係助詞の分布調査とその型—」(『国学院高等学校紀要』1983)「流布本『狭衣物語』の係り結び—係助詞の分布とその型—」(『文教大学国文』1985)「『夜の寝覚』の係り結び—係助詞の分布とその型—」(『国語研究』)1985)「『浜松中納言物語』の係り結び—係助詞の分布とその型—」(『立教大学教育学部紀要』1986)「歌物語の係り結び—『伊勢物語』と『大和物語』との比較—」(『国学院高等学校紀要』1987)「『竹取物語』の係り結び—歌物語との比較—」(『文教大学国文』1990)「『徒然草』の章段内容と係り結び」(同1992)「『源氏物語』係結小考—始発「桐壺」巻」(同1994)「『源氏物語』係結小考—第二巻「帚木」巻」(同1996)「『源氏物語』係結考—「若菜上」における—」(『文学部紀要』2002)「『源氏物語』係結考—「若菜下」における—」(『立教大学国文』2002)／菅原美枝子・須田幸子「『平家物語』の会話文における係助詞「ぞ」「こそ」の用法について」(『国文鶴見』1973)／伊牟田経久「ゾ・ナム・コソの差異—蜻蛉日記を中心に—」(『馬淵和夫博士退官記念国語学論集』1981)／井上章子・辰巳順子「『今昔物語』の係助詞ゾ・ナム・コソの文体論的考察」(『大谷女子大國文』1982)／森野崇「係助詞「なむ」の伝達性—『源氏物語』の用例から—」(『国文学研究』1987)／安部清哉「語彙／語法史から見る資料—『篁物語』の成立時期をめぐりて—」(『国語学』1996)「『土佐日記』の形容詞語彙の特徴」(『日本語研究法』1998)／村田菜穂子『形容詞・形容動詞の語彙的研究』(和泉書院2005)